

軍事力があれば身を守れる
経済さえ豊かであれば
幸せになれる？

アフガニスタンでの実体験によって
私たちは幸いにも
この強力な迷信から
自由です



故 中村哲医師 (73)

'91年アフガニスタン東部で診療所をはじめ医療・農業支援活動。1600本の井戸や25kmの用水路による緑地化で約60万人の生活を保証。2019年10月、同国で名誉市民権・勲章授与。

軍事力があれば身を守れる、経済さえ豊かであれば幸せになれる？アフガニスタンでの
実体験によって、私たちは幸いにもこの強力な迷信から自由です。 by 中村哲

◆「アフガニスタンで事業をおこなうことによって、少なくとも私は世界中を席卷している迷信から自由でいられるのです。一つには、お金さえあれば幸せになれる、経済さえ豊かであれば幸せになれる、というものです」

「もう一つは、武力があれば軍事力があれば自分の身を守れるという迷信です。武力が安全をもたらすものかどうか、丸腰でおこなう用水路建設での私たちの経験が教えてくれます。このような実体験によって、私たちは幸いにもこの強力な迷信から自由です」（『カラー版 アフガニスタンで考える』岩波書店 Twitter より）

◆「日本が、日本人が展開しているという信頼が大きいのは間違いありません。アフガンで日露戦争とヒロシマ・ナガサキを知らない人はいません。（中略）言ってみれば、憲法9条を具現化してきた国のあり方が信頼の源になっているのです」

「NGOにしてもJICAにしても、日本の支援には政治的野心がない。見返りを求めないし市場開拓の先駆けにもしない。そういう見方が、アフガン社会の隅々に定着しているのです。その信頼感に助けられて何度も命拾いをしてきました。診療所を展開していたころも、『日本人が開設する』ことが決め手になり地元が協力してくれました」（中略）

「それに、自衛隊にNGOの警護はできません。アフガンでは現地の作業員に『武器を持って集まれ』と号令すれば、すぐに1個中隊ができる。兵農未分離のアフガン社会では、全員が潜在的な準武装勢力です。アフガン人ですら敵と味方が分からないのに、外国の部隊がどうやって敵を見分けるのですか？机上の空論です」

「軍隊に守られながら道路工事をしていたトルコやインドの会社は、狙撃されて殉職者を出しました。私たちも残念ながら日本人職員が1人、武装勢力に拉致され凶弾に倒れました。それでも、これまで通り、政治的野心を持たず、見返りを求めず、強大な軍事力に頼らない民生支援に徹する。これが最良の結果を生むと、30年の経験から断言します」（インタビュー：アフガン復興を支える 2016/1/30 朝日新聞から）

◆「麻薬地帯や治安の悪い地域は完全に旱魃地図に一致している。出稼ぎの仕事の一つが傭兵で、みな家族を養うために、仕方なく銃を握らざるを得ないのだ」（中略）

「最近の研究で、アフガン東部の温暖化は過去60年で1.8度、実に他の2倍の速度で進んでいるという恐るべき報告もある（河野仁「アフガニスタンの干ばつと洪水—地球温暖化の影響」）」（中略）

「現在世界中で描かれる対策は、単にCO2排出を規制して気温を下げるにとどまらない。化石燃料を基礎に作られてきた近代的生産と生活を問い直し、大量消費=大量生産のイタチごっこを絶ち、持続可能な安定した社会と安全な自然環境を実現しようとする穏当なものである」（中略）

「アフガン内戦の平和的解決も重要である。戦争は最大の消費かつ浪費である。紛争の遠因が貪欲な経済活動や地球温暖化、旱魃と関係しあっているなら、その取り組みを通して世界の融和と安定に寄与することにもなる」（中略）

「おそらく温暖化とその対策は人類史的な分岐点である。それは、近代的生産を支えてきた我々の価値観自身を、やがて根源的に問うものとならざるを得ないからだ。

アフガニスタンの大旱魃は決して他人事ではない。我々が旱魃の地で「人と人の和解、人と自然の和解」を説く理由もここにある」（『世界』2019年2月号から）

◆「日本に帰ると別の惑星に来たように感じる。第一に元気がない。アフガニスタンでの最高に近い医療が受けられ、恵まれている割にみな不幸な顔をしており、自殺が多い。アフガニスタンは貧しい国で、他殺はたくさんあるが自殺はない。

日本の政権については、こんなバカな政権はない。向こうではみな権力に対して従順でない気風がある。対照的に日本人ほど権力に弱い国はないと感じる。現政権がアフガニスタンに出現したとするなら、もう何十回か暗殺されている。その点が日本との違いだ。個人的なことをいうと憲法に従う義務はあるが、政権に従う義務はないと考えている」（山口・宇部市での講演 2015/8/30 から）